

令和5年度
東京藝術大学大学院 美術研究科
博士後期課程学位論文

「魔術的なるもの」による人体彫刻の実践
要旨

東京藝術大学大学院美術研究科
先端芸術表現研究領域
学籍番号：1317927
謝花翔陽

筆者は美術教育の基礎として学んだ彫刻という分野の中でも特に人体彫刻というものが、古代から現代までその概念を拡張させながら有効性を持ち続けているということに感銘を受けた。人体彫刻が古代から現代に至るまで表現としての有効性を保ち続けているという手堅さを自身の作品への適用方法を模索した結果、コンセプトにおいても不変で手堅い概念を持った主題を扱うという志向を持つに至った。それにより自身の生活や恋愛さらにはそれを通じた自己の在り方についての考察から、作品の主題を立ち上げることとなった。いわばアクシデントである恋愛を含む生活つまり他者や外部からの影響で制作を促され、作品を以ってそれら「魔術的なもの」への接触を試みている。

本論では、彫刻の側面のひとつである「他律性」に着目し、同時に自身の制作姿勢と「魔術的なもの」における「他律性」、特に近代魔術における儀式魔術にまつわる諸法と共通する観点から発生する「他律性」について思索を深めていく。この「魔術的なもの」とは、これまで人類が必要とし尚且つ今後も必要とするもの、つまり信仰であり、それは倫理観や良心と呼ぶものでもあるだろう。近代魔術の方法論に鑑み、あらゆる制作手段を用いた概念的な人体彫刻の実践という形で「魔術的なもの」を提示することを試みる。



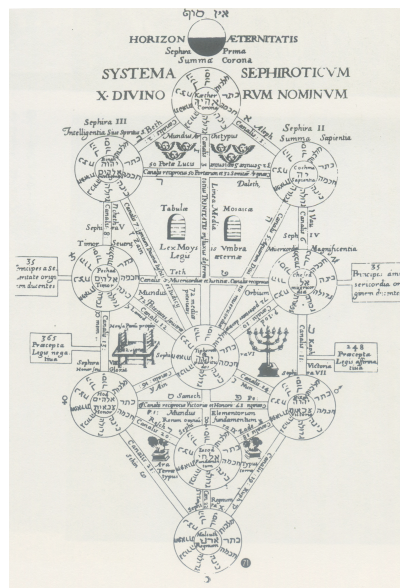
人体彫刻の実践を平面という形式で模索した作品

『Untitled (Red Dragon)』 (2020)



人体彫刻の実践をインスタレーションとそこで行うパフォーマンスによって模索した作品
『Aftermath of Evil Deeds, and Everlasting Princess Mind』 (Bambinart Gallery、2017)

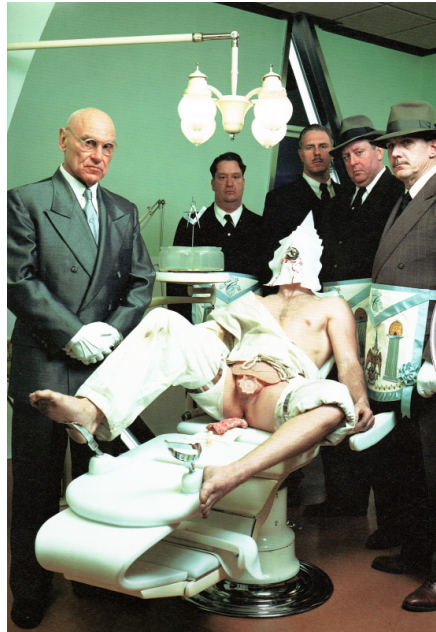
第1章では、筆者の出自である彫刻というものを筆者がどのように捉え扱っているかを踏まえて筆者の経歴、作品・作風を紹介する。また魔術という言葉の定義付けを行い、そこから筆者が導き出したキーワードである「魔術的なるもの」と彫刻そして人体彫刻との共通点を明確にする。そして彫刻におけるひとつの側面としての他律性について検証し、筆者の主題である「魔術的なるもの」と彫刻との繋がりを、制作において重要な要素である他律性という言葉を用いて説明する。



セフィロトの樹 (アタナシウス・キルヒャー『エジプトのオイディプス』(1652))

(ロジャー・クック、植島啓司・訳、『生命の樹：中心のシンボリズム』、平凡社、1982、イメージの博物誌 15、p.132)

第2章では、1900年代初頭からの欧州の「魔術的なもの」の再評価についての事例を通して先行例を示しながら、筆者の制作のリファレンスとなるものを取り上げる。1970年代ごろからのカルチャーを紐解きながら美術と音楽と魔術の結びつきを詳述し、1990年代初頭の事例では「魔術的なもの」と音楽そしてユーモアについての検証を行う。また、この思考を用いた作品制作を行っているという筆者が捉えた先行作家の作例を通し、自作との関連性を探ることで彫刻と他律性を内包した「魔術的なもの」について分析する。



マシュー・バーニー『クレマスター3』

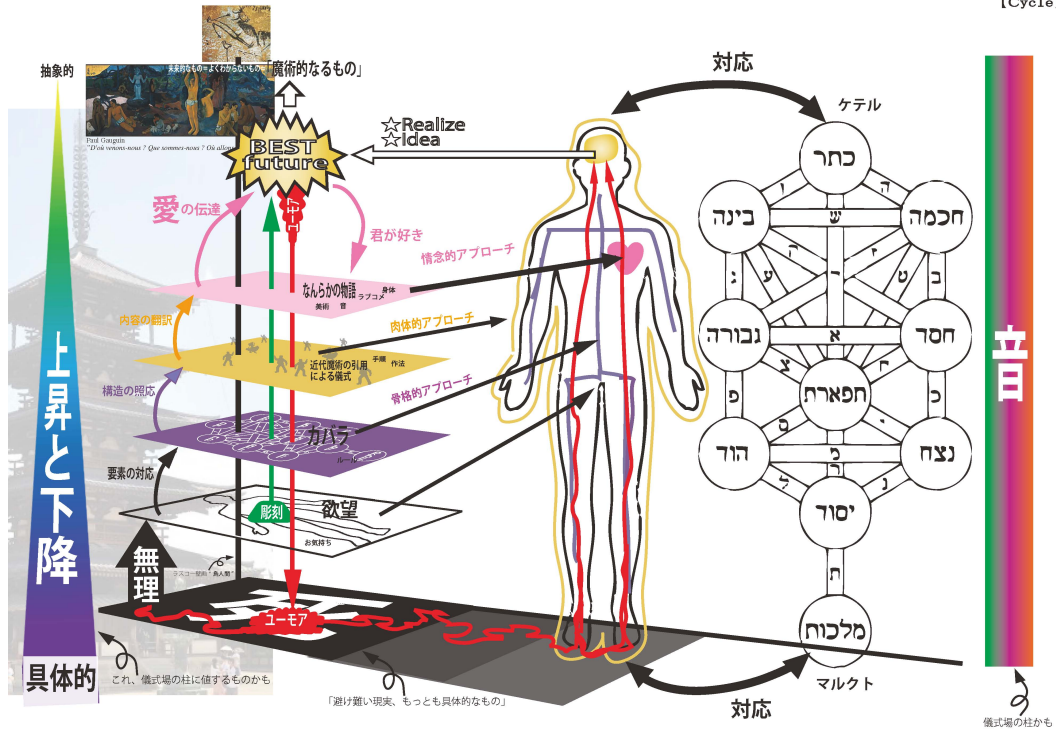
(Nancy Spector, *Matthew Barney: The Cremaster Cycle*, Guggenheim Museum Publications, 2003, p.295)

第3章では、筆者の平面中心の初期作品についての解説を行い、その実践例を紹介する。

第4章では、インスタレーションによる作品の解説と実践例を紹介する。

第5章では、パフォーマンスと儀式性についての実践を通じた解説と博士展への道筋を示す。

第6章では、筆者のこれまでの研究を反映させた音と身体と彫刻作品によるインスタレーション及びパフォーマンスによる博士展作品を解説する。



博士審査展作品のコンセプト構造図

筆者は「魔術的なもの」とは「自分の力ではどうすることもできない事柄」に対して存在するものであると定義した。「魔術的なもの」は、かつて主流であり次第に廃れつつあったが、その重要性に気づいた人々によって現代まで受け継がれてきた。筆者はその系譜を継承している。

筆者の実践が、芸術については現代における信仰の有効性を分析しその手引きとなり、この先の文化創造において彫刻と「魔術的なもの」への関心を持ち続ける人々へのひとつの提案となれば幸いである。

よって本論は「自分の力ではどうしようもない事柄」つまり「わけのわからないもの」を、自分の力だけでは成し得ない一見不合理と思われる諸力としての「魔術」や「芸術」を援用し「魔術的なもの」つまり信仰すなわち倫理観や良心といったものを探る試みである。さらにはそれらの価値の再確認を促す動機付けとなることを期待する。